

# 卒都婆小町

古名

小町物狂

観阿弥作

ワキ

高野山の僧

ワキヅレ

同伴僧

シテ

小野小町

地は

山城

季は

雑

ワキ次第

「山は浅きに隠れがの。く。深きや心なるらん。

詞

「これは高野山より出でたる僧にて候。我このたび  
都にのぼらばやと思ひ候。

サシ

「それ前仏は既に去り。後仏はいまだ世に出でず。

ワキ、ツレ

「夢の中間に生れ来て。何を現と思ふべき。たま

く受け難き人身を受け。逢ひ難き如来の仏教に  
逢ひ奉る事。これぞ悟りの種なると。

下歌

「思ふ心もひとへなる。墨の衣に身をなして。

上歌

「生れぬさきの身を知れば。く。憐むべき親もな

し。親のなければ我ために。心を留むる子もなし。

千里を行くも遠からず。野に臥し山に泊る身の。

これぞ誠のすみかなる。く。

シテ次第

「身は浮草をさそふ水。く。なきこそ悲しかりけ  
れ。

サシ

「あはれやげにいにしへは。驕慢もつとも甚しう。

翡翠のかんざしは婀娜とたをやかにして。楊柳の

春の風になびくが如し。また鶯舌の囀りは。露を  
含める糸萩の。かごとばかりに散りそむる。花よ  
りもなほめづらしや。今は民間賤の女にさへ穢な  
まれ。諸人に恥をさらし。うれしからぬ月日身に  
積つて。百年の姥と為りて候。

下歌「都は人目つゝましや。もしもそれとか夕まぐれ。

上歌「月もろともに出でゝ行く。く。雲井百敷や。大  
内山の山守も。かゝる憂き身はよも咎めじ。木が

くれてよしなや。鳥羽の恋塚秋の山。月の桂の河  
瀬舟。漕ぎゆく人は誰やらん。く。

シテ詞「あまりに苦しう候ふほどに。これなる朽木に腰を  
懸けて休まばやと思ひ候。

ワキ詞「なふはや日の暮れて候ふ道を急がうずるにて候。  
や。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒都婆  
にて候。教化してのけうずるにて候。いかにこれ  
なる乞丐人。お事の腰かけたるは。かたじけなく

も仏体色性の卒都婆にては無きか。そこ立ちのきて余の所に休み候へ。

シテ「仏体色性のかたじけなきとは宣へども。是ほどに文字も見えず。刻める像もなし。たゞ朽木とこそ見えたれ。

ワキ「たとひ深山の朽木なりとも。花咲きし木はかくれもなし。いはんや仏体に刻める木。などかするしのなかるべき。

シテ「我也賤しき埋木なれども。心の花のまだ有れば。手向になどかならざらん。さて仏体たるべき謂は如何に。

ワキツレ「それ卒都婆は金剛薩埵。かりに出仮して三摩耶形を行ひ給ふ。

シテ「行ひなせる形は如何に。

ワキ「地水火風空。

シテ「五体五輪は人の体。何しに隔あるべきぞ。

ワキ、ツレ 「形はそれに違はずとも。心功德はかはるべし。

シテ 「さて卒都婆の功德は如何に。

ワキ 「一見卒都婆永離三悪道。

シテ 「一念発起菩提心。それも如何でか劣るべき。

ツレ 「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ。

シテ 「姿が世をも厭はゞこそ。心こそ厭へ。

ワキ 「心なき身なればこそ。仏体をば知らざるらめ。

シテ 「仏体と知ればこそ卒都婆には近づきたれ。

ツレ 「さらばなど礼をば為さで敷きたるぞ。

シテ 「とても臥したる此卒都婆。我も休むは苦しいか。

ワキ 「それは順縁にはづれたり。

シテ 「逆縁なりと浮ぶべし。

ツレ 「提婆が悪も。

シテ 「観音の慈悲。

ワキ 「槃特が愚痴も。

シテ 「文珠の智恵。

ツレ「悪と云ふも。

シテ「善なり。

ワキ「煩惱といふも。

シテ「菩提なり。

ツレ「菩提もと。

シテ「植木にあらず。

ワキ「明鏡また。

シテ「台に無し。

地「げに本来一物なき時は。仏も衆生も隔なし。もとより愚痴の凡夫を。救はん為めの方便の。深き誓ひの願なれば。逆縁なりと浮ぶべしと。ねんごろに申せば。誠に悟れる非人なりとて。僧は頭を地につけて。三度礼し給へば。

シテ「我は此時力を得。なほ戯れの歌をよむ。極楽の内ならばこそ悪しからめ。外は何かは苦しかるべき。

地「むつかしの僧の教化や。く。

ワキ詞 「さて御事は如何なる人ぞ名を御名のり候へ。

シテ詞 「はづかしながら名を名のり候ふべし。これは出羽の郡司小野の良実がむすめ。小野の小町が為れる果にてさぶらふなり。

ワキ、ツレ 「いたはしやな小町は。さもいにしへは優女にて。花のかたちかゝやき。桂の黛青うして。白粉を絶えさず。羅綾の衣多うして。桂殿の間に余りしぞかし。

シテ 「歌をよみ詩を作り。

地 「酔をすゝむる盃は。漢月袖に静なり。まこと優なる有様の。いつ其ほどに引きかへて。頭には霜蓬をいたゞき。嬋妍たりし両鬢も。膚にかしけて墨みだれ。艶々たりし双蛾も。遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくも髪。斯かる思ひは有明の。影はづかしき我身かな。

ロンギ地 「首に懸けたる袋には。如何なる物を入れたるぞ。

シテ「今日も命は知らねども。明日の飢ゑを助けんと。

粟豆の餉を。袋に入れて持ちたるよ。

地「うしろに負へる袋には。

シテ「垢膩の垢づける衣あり。

地「臂にかけたるあじかには。白黒の田烏子あり。

地「破れ簞。

シテ「やぶれ笠。

地「面ばかりも隠さねば。

シテ「まして霜雪雨露。

地「なみだをだにも抑ふべき。袂も袖もあらばこそ。

今は路頭にさそらひ。往来の人に物を乞ふ。乞ひ

得ぬ時は悪心。また狂乱の心つきて。声かはりけ

しからず。

シテ「なふ物給べなふ御僧なふ。

ワキ詞「何事ぞ。

シテ詞「小町がもとへ通はうよなふ。



ワキ「おことこそ小町よ。何とて現なき事をば申すぞ。

シテ「いや小町といふ人は。あまりに色が深うて。あなた  
の玉章こなたの文。かきくれて降る五月雨の。空言なりとも一度の返事もなうて。いま百年に為るが報うて。あら人恋しや。あら人こひしや。

ワキ「人こひしいとは。さてお事には如何なる者のつきそひてあるぞ。

シテ「小町に心を懸けし人は多き中にも。殊に思ひ深草

の四位の少将の。

地「恨みの数のめぐり来て。車のしづに通はん。日は何時ぞ夕暮。月こそ友よ通路の。関守はありとも。

留まるまじや出で立たん。

シテ「浄衣の袴かいとつて。

地「浄衣の袴かいとつて。立烏帽子を風折り。狩衣の袖をうちかづいて。人目しのぶの通路の。月にも行く暗にも行く。雨の夜も風の夜も。木の葉の時

雨雪ふかし。

シテ「軒の玉水とくく」と。

地「行きてはかへりくくては行き。一夜二夜三夜四夜。

七夜八夜九夜。豊の明の節会にも。逢はでぞかよ  
ふ庭鳥の。時をもかへず暁の。榻のはしがき。百  
夜までと通ひるて。九十九夜になりたり。

シテ「あら苦し目まひや。

地「胸くるしやと悲しみて。一夜を待たで死したりし。

深草の少将の。その怨念が付き添ひて。かやうに  
物には狂はするぞや。

地「これにつけても後の世を。願ふぞ誠なりける。砂  
を塔と重ねて。黄金の膚こまやかに。花を仏に手  
向けつゝ。悟りの道に入らうよ。く。